

教科体育の構図

大西 國 男*

(1985年4月30日受理)

A Proposal of Composition for Physical Education Course of study

Kunio Ōnishi*

キー・ワード：教育課程，学習内容，運動特性，指導過程，学習指導場面

体育は身体活動による教育の面で，身体活動を手段とする教育の体系である。この構想は，教科教育法における教授学的操作と関連をもつ要素を適宜に配置しながら，構成できる学習活動の関連図形を考え，教科体育の構図を描こうとするものである。

教育の目標を達成するためには，多面的な内容をもった授業が必要である。ここでは，学校教育活動に関連する体育の領域を確認しながら，教科体育の中核を身体運動として捉えた。そして，教科体育における学習領域を把握し，体育目標を達成するための学習内容と，実践指導活動に当っての指導過程の構図を考えたものである。

運動の特性による教材の精選と，その指導に当っての運動処方を考慮すべきこと，そして運動文化財の特徴を日常生活における役割的観点から整理することを考えた。そのためには，各種運動の構造の特性と技術の分析から，学年別技能要素と技能習得の過程の整理を試みることである。それは，技能の習得がもつ生活における意味の発見となり，運動の効果がわかって運動の生活化へと発展する素地を，具体的な事象として把握することを強調することである。

作図に当っては，教科教育学の専門領域として，課程論（目標，学習内容），学習論（学習活動，指導過程），教授論（指導形態，管理，評価）の中心要素を配置し，教科体育の実践活動について体育科教育の総括的整理を意図した構図を試みたのである。

* 茨城大学教育学部

1 学校教育活動に関する体育の領域

教育課程は、教科観、課程観の捉え方や概念規定によって変遷する。1951年、学習指導要領一般篇によれば、その地域の生活特性、その地域の児童生徒の生活特性によって構成されるべきものであり、社会の変化や発展につれて変るべきものであるとしている。しかし、その教育課程の変遷過程については、すでに知見を持つものと考え、ここでは次の規定によるものとした。

「教育課程とは、国の定める基準に基づき、学校において各教科、道徳、特別活動および学校行事等の4領域について、学年に応じてその目標、内容、指導に充てる時間等を組織的に配列したものをいう。」(1958年)という規定をもとに、その規準として国が公示する学習指導要領によるものとなった。

その後、学習指導要領(1968年)総則「教育課程一般」および「学校教育法施行規則」の改正によって、教育課程は各教科、道徳、および特別活動の3領域で編成されるものとなった。中学校では「必修教科、選択教科、道徳および特別活動」高等学校では「各教科に属する科目及び特別活動によって編成する」ものと規定している。

学 校 内		教 科 体 育 (必修教科・選択教科)	
		特 別 活 動	ク ラ ブ 活 動
内	育	学校行事	運動会、学習発表会、校内競技会 記録会、身体検査、安全指導
		その他の 体育活動	全校体育、業間体育、体力テスト 学校給食
学 校 外	社 会 体 育 活 動	領活 域外 動	夏・冬期などの体育活動 課外体育、運動部活動
		学校 外体 育活 動	スポーツ少年団、スポーツクラブ 各種競技大会、レクリエーション大会 スポーツ教室、健康体力づくり教室、野外活動 参加 集団活動(こども会、消防団)

第1図 学校教育活動に関連する体育の領域

は元来各地域や学校の実情に即して構成され、教育実践を通じてその実際の成果を評価反省する中から再構成されるものであり、それは継続的発展的に編成を志向すべき性格を持つべきである。

戦後の教育改革によって、各学校の自主カリキュラムの編成が奨励され、各学校各地域でのカリキュラムの研究が盛に行われた。体育科の場合では「体育の生活単元や行事単元」が考案され実施された。しかし、1958年の小学校学習指導要領の公布から、国家基準による拘束性による支配が生まれたのである。1968年次降の教育課程は、前掲の通りである。

カリキュラムの編成に当っては、時代の要求に対応した教育課程(カリキュラムの訳語に相当)が構想されなければならない。学習指導要領(1951)では「学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である」という考え方で捉えている。

このような考え方からは、カリキュラムと

1) 学校体育の領域

体育カリキュラムが対象とすべき学校体育の領域が決定されている。したがって、次の諸領域全般にわたって編成される必要がある。

(1) 教科体育

中学校では、内容の領域はAからEまでの5領域にわたっており、F（体育に関する知識）、G（その他の領域）の内容が示されている。それは①すべての学校で取り扱うべきもの②一定の範囲内で選択を認めているもの③学校の主体的な選択に委ねているものである。

(2) 特別活動（クラブ活動、体育行事）

「クラブ活動は、いわゆる「部活動」とは異なり、全生徒を対象とするものである。」各学校がクラブ種別や数をきめようとするときは「生徒の希望、男女の構成、学校の伝統、施設設備の実態、指導に当る教師の有無などについて検討しておく必要がある。」（中学校学習指導要領、1969、P 250）クラブ活動に充てる時間数については「毎週実施できるよう配慮する必要がある。」（P123）

「体育行事は、心身の健全な発達と体力の向上に資し、公正に行動し、協力して責任を果たす態度を育てるような活動を行うこと」（同上、P 108）であり、運動会、臨海学習、校内競技会、記録会などが行われる。行事と教科学習との融合、クラブ活動と校内競技会との関連などの工夫がカリキュラム構成上の課題となる。

(3) 総則第三に示している「体育」

このことは学校における教育活動全体に関連する領域であり、「業間体育」「全校体育」などがこれに当る。それは「適切な体育的活動の実践が促されるよう配慮しなければならない。」ことに該当する活動である。さらに「学校裁量の時間」を体育活動時間として確保し、効果的に活用していくことが考えられる。

2) 各領域の総時間数

各教科、道徳および特別活動の指導が一定の時間内で行われるためには、授業時数の標準が必要になるのである。以上のような教育課程編成の上では、時間数の配当が重要な要素となる。これについては「学校教育法施行規則」（中学校：第54条別表2）に授業時数の標準を示している。

中学校は、保健を含めて3年間で315時間で、そのうち体育には260時間配当することになっている。加えて、第3学年には選択教科としての「保健体育」に35時間を配当することができる。

高等学校は、7～9単位（1単位は1単位時間×35週）を標準とし、全日制普通科男子は11単位である。特別活動は総時間70時間であり、その一部を適宜クラブ活動や体育行事にあてる。

2 教科体育における学習領域

体育科は運動を媒介とした教科である。その内容は直接運動実践の内容と運動実践に関連した知識について考えることができる。それは、体育科の目標を達成するためにどんな内容を設定すればよいか、体育目標と関連した内容としてどの程度の技能、知識、態度を身につければよいかに関わることである。そのためには、運動教材の運動文化財的価値および学習者の発達や能力によって、

内容や質が規定され量化されて、指導の過程が順序づけられることが必要である。

	体育の目標	→ 学習の領域	→ 学習内容
総合的 内容	教科の目標 学校教育法 (35・36条)	体 操	A 体 操
		ス ポ ー ツ	B 個人的スポーツ C 集団的スポーツ D 格 技
↓ 具体的 内容	特 殊 的	身体発達, 技能向上	運 動 の 構 造
	普 遍 的	個人的要求	欲求, 実態の把握
		社会的 } 要 請 現代的 }	適応 } 問題意識 即応 }
↓ 展 開	目 標 の 構 造	内 容 の 構 造	指 導 過 程 の 構 造
	① 身体的(体力の向上)	(技能が中核)	
	② 日常的(運動の楽しさ)	運 動 内 容	技 能 習 得 の 過 程
	③ 健康的(健康安全)	学 習 内 容	内 容 習 得 の 過 程
	評 価		

第2図 教科体育における学習領域の構図(中学校)
内容設定の三側面(○運動文化○発育発達○社会発展)

体育に関する知識の内容では、運動と心身のはたらき、運動の練習と体力の測定の2項目に整理されている。体力の測定を運動効果や運動の練習計画に有効に活用することである。

すなわち、運動の領域においては運動の特性に応じて基礎的、基本的なものに精選したので、生徒の能力や技能の程度に応じた内容を、時間をかけて指導できるようにしたのである。

2) 学習者の実態及び社会的要請との関連

目標に照らしてふさわしい内容という判断だけでは、学習の成立や効果を期待することはできない。それは、学習者の発達や能力として適当なものでなければならない。すなわち、学習者の要求、興味、レディネス、個人差などの実態を把握した配慮が必要である。

地域社会においては、地域で盛んなスポーツや参加方法などにも特徴がある。そのことも含めて生涯を通して運動実践する能力や態度を養うことが必要である。健康な生活を営むために、スポーツや運動の意味を理解し、生活の中の運動参加意識を育てる配慮が大切である。

3) 内容の構造と学習内容

体育の内容は、体育の目標を達成するために必要な学習すべき内容のことである。したがって、内容

1) 内容の領域構成と精選
運動の内容は「運動の方法や技能」「運動に関連した態度や知識」に分けられ、直接運動実践の内容は、運動の特性から体操、スポーツ、ダンスに大別されている。

体操は、身体のはたらきを高め、体力づくりを直接ねらえる合理的な運動である。

スポーツは、運動技能を習得し、運動そのものを楽しみを求める運動である。

ダンスは、思想や感情を運動によって、リズムカルに創造的に表現する運動である。

は運動教材だけを意味するものではなく、学習内容を意味するものとする。これは、学習内容を教材（運動）と目標を直結させるという立場からのみではなく、目標達成の手段や材料であるという立場で考えるべきである。体育の目標と具体的な内容の関連を図ることが必要である。

内容の構造は、体育の目標を達成するために選び出した各種の運動からなっている。それに体育に関する知識の内容が加えられる。すなわち、価値ある運動文化財（運動教材）を選び、技能を中核とする内容の構造化を図る必要がある。そして、それらの運動をどのように学習させるか。どういう順序でどの程度指導するか。そこに学習の展開の場が生まれ、目標と教材（運動）を結ぶ指導方法が生まれるのである。指導過程の構造化を図ることが必要である。

学習内容は、体育の目標を具体的な事実として把握し、学習活動の場面において行動目標に転換したものであると考えることができる。したがって、生徒が取り組むべき活動（運動教材）の展開が学習活動である。各種の運動のうちから、学習の対象として運動を選択精選し、運動の特性による運動処方、運動効果の分析等による指導が期待されるのである。

すなわち、学習の対象として運動教材を体系的に組織化した取り扱いとして教材を考えるのである。そして授業の実践は、体育目標との関連で学習内容が組織されなければならない。このことは、教科の本質や生徒の発育・発達等に照らして、価値的に取捨選択しながら教材として再構成することである。学習領域の具体的な内容をどのように展開するかについての構図が必要である。

3 教科体育における体育目標の展開

教育課程審議会答申「教育課程の基準の改善のねらい」によれば（「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の改善について」1973、11文部大臣諮問、1976、12答申）

- (1) 人間性豊かな児童生徒を育てること
- (2) ゆとりあるしかも充実した学校生活が送れるようにすること
- (3) 国民として必要とされる基礎的、基本的内容を重視するとともに児童・生徒の個性や能力に応じた教育が行われるようにすることと述べている。

これを考えると、高度経済成長や科学技術的志向の偏重から、人間志向の発想にむけて基本的な修正を求め、豊かな人間味ある教育を取り戻そうとする学習者中心教育に依拠したものである。

1) 体育科の目標

体育科の目標は、教科の特性による目標が考えられる。健康の増進及び体力の向上を図るという点からは、従前と同様に教科の特性による目標である。そのうえ運動の楽しさや生活を健全に明るくする能力や態度を育てることを目標に掲げている。教科の特殊目標と一般目標が考えられる。

(1) 体育科の特殊目標

教科独特の目標として、身体的発達の促進と体力を高め運動技能の向上を図ることをあげることができる。そして、運動やスポーツの楽しさや喜びを体得するために必要なルール、マナーなどの態度の育成を目標としている。それは体育科独自の特殊目標と考えることができる。

生徒の立場から、発育発達に応じた可能性及び運動の楽しさ、よろこびを体得できる内容を、ど

の程度実施すればよいか。生徒個々人の要求や必要に応じた目標が考えられる。生徒の発達の特徴と運動の特性を考え合わせ、その運動処方によって運動効果を期待すべきである。

	↓	体 育 目 標	↓
教 材(運動)		特殊<身心発達 技能向上>	個人・社会の要請
		一般<社会性 健康安全>	
特性<運動特性 価値分析(精選)		指 導 (進展)	運 動 の 楽 し さ
指 導 法 (運動の克服)		展 開 (技術獲得)	運 動 文 化
学 習 者 の 研 究 運 動 の 研 究		教 科 体 育 の 取 り 組 み	生 涯 体 育
	↑	学 習 内 容	↑

第3図 教科体育における体育目標の展開構図
 ～、強健な心身の発達を促し、生涯を通じて継続的に運動を實踐できる能力と態度を育てる。
 (1978年指導要領 高等学校 体育目標)

〔体育分野の目標〕

1977年指導要領 中学校

1. 各種の運動を適切に行わせることによって強健な身体を育てるとともに、強い意志を養い体力の向上をはかる。
2. 各種の運動の合理的な実践を通して運動技能を習得させ、運動の楽しさを味わわせるとともに、生活を健全に明るくする能力と態度を育てる。
3. 運動における競争や協同の経験を通して公正な態度を育て、進んで規則を守り、互に協力して責任を果たすなどの態度を育てる。
4. 健康・安全に留意して運動ができる態度を育てる。

(2) 体育科の一般目標

教科体育の一般目標として、健康の増進と安全の確保をあげることができる。生徒の要求や技能の程度に応じて、運動するための諸条件に対応した参加が必要である。健康の増進と安全は、学校の教育活動全体を通じて行うべきことである。そして、生徒個人の立場からは運動の内容がどんな意味をもつか、運動やスポーツが日常生活々動の中で示す社会的意味について自覚を深めることである。それは生涯スポーツへ発展するための社会的要請の面に関連するものである。

2) 運動(教材)の性格

運動は目標達成のために使われる教材であり、それは目標達成のための価値評価によるところである。目標と教材が分離することはあり得ないし、教材は学習内容となるものであるから、目標～教材～学習内容の関係で考えることができる。教材は、文化遺産である運動を価値的に組織し、分類し、なかんづく運動技術を学習することによって、基本的な身体的能力(技能、表現能力、健康安全)や、運動文化に対する知的、技術的、社会的認識などを多面的に発達させることを課題とするものである。

体育科の場合は、教材は主として各種の運動である。したがって、教材である運動は、目標や学習内容に対しては学習の場を提供する材料である。体育における学習活動である身体運動の場面は、運動の身体的価値、集団活動的価値、社会生活的価値に変換する教育実践領域である。

このように考えると、運動は学習の場を提供する教材という手段の面だけではなく、その運動(教材)を身につける学習内容の面を持っている。すなわち、運動教材は手段であり内容であるという二重性格を持つものと考えることができる。

3) 学習活動の展開要素

学習指導の展開(指導過程の構図)においては、学習理論が学習活動を秩序づける主要な柱として厳存すべきである。そこから教師の取り組み姿勢が確立される。その基調には、学習者の研究と運動教材の研究が在り、それは継続的、系統的な基本姿勢として堅持されなければならない。学習指導の展開に当っては、次の3つを「要」と考えることができる。

- ① 目的意識(活動展開のねらいと技術習得の文化的・社会的意味)を適格に把握する。
- ② 新しい経験(課題の提供)に対する取り組み意欲の高まりを期して計画立案する。
- ③ 個人の要求、期待に満足(課題の克服、運動の楽しさ)を覚える取り組みをする。
(運動好きにすることを基本的姿勢とする)

(1) 運動の分析(運動特性)

学習の構造として、学習段階や技術内容に関連して考えた構成が必要である。その点から運動の構造的特性と技術の構成要素の分析を試みるべきである。すなわち、運動方法学的観点(運動技能習得の効果的、効率的、経済的な実践活動の方法)から、運動(教材)の特性を把握し、学習者の技能習得の過程および認識過程を組み立てることが大切である。

- ① 運動の技術分析: 運動の技術要素を分析し、技術内容の構成要素を組み立てる。
- ② 運動の価値分析: 運動の社会的、文化的価値及び運動文化の特性による学習内容を組み立てる。

(2) 学習活動展開の視点(指導形態、方法)

学習目標を具体的な活動として把握するために学習活動を展開する。学習指導の形態においては、授業の組織構造の面(教師と生徒および生徒の相互間の社会的人間関係の視点)から、一斉指導、個別指導、小集団指導(班別指導、グループ学習指導)が行われる。

教授の実施様式(提示、誘導、刺戟など)並びに教授目標から、問題(課題)解決法による経験学習がある。とくに基礎的な運動能力や運動技能の養成に重点が置かれた場合は、その運動の発展的、系統的な指導法が行われるのである。

多様な指導形態を考え、採用する必要がある。以上は、組織構造上からの分類が特徴である。さきに述べた小集団指導では、班別学習のような学習区分ではなくて、社会的協力関係に重点を置いた集団学習形態である。それは、問題解決学習(学習方法論から)やグループ学習(学習形態論から)の中から採り上げるべきである。現実には明確に区別できにくい面(区別する必要はない)がある。学習活動を展開するに当っては、次のような視点を考慮に入れておくことが必要である。

- ① 系統的な面 — 段階的-発展的
- ② 領域的な面 — 基礎的-応用的
- ③ 特殊的な面 — 個人・集団-運動の特徴
- ④ 指導法の面 — 個人の課題-グループの課題

学習指導形態は、教材の取り扱い方や単元の展開において、学習者をどのように組織し指導するかが大切である。学習活動の場面はそのために構成されるものである。

(3) 指導法（運動場面の構成）

学習活動を教科指導の目標に有効に結びつけようとする営みが学習指導法である。学習活動においては、これまでに習得して来た知識、技能、態度をもとにして、更に進んだ課題へと発展しながら、新しい経験への適応に向けて自主的活動を展開することである。したがって、「指導法とは、教科の目標に応じて学習内容を構成し、環境や学習条件を備えること（運動の構造と分析、活動場面の構成）によって、児童生徒が正しくしかも効果的な学習活動を意欲的、積極的に進めていくための指導助言の手だてであると考えることができる。」（浅田隆夫編「体育科教育法」（一般理論、指導法とは：大西分担）学術図書出版、1983、P 144）

指導法が展開されるに当たっては、主に次のような事項が重層的に配慮され、連携しながら活動が構成されるであろう。

- ① どんな特性やねらいを持った教材を選択し構成したか
- ② 学習主体である児童生徒の実態をどのように理解し把握したか
- ③ 教師の指導の意図はどこにあるか。

この点では、指導法はきわめて個性的であり、独創的なものであるというべきである。指導目標としては、運動の楽しさや喜びを体験させることによって運動に親しませる。自分から進んで健康の増進や体力の向上を図る意欲を育てる。運動やスポーツに積極的に参加することによって、楽しく明るい生活を営む態度を育てることである。このことは、子どもの主体的、創造的な学習活動を基盤としながら、運動の特性や子どもの発達特性にもとづいた運動場면을構成することである。

4 教科体育の指導過程

体育科教育の構図を描こうとすれば、体育の目標と関連した教科内容の枠組をどうするか。学習指導要領と関連した実践指導過程の内容（学習指導過程と技能習得過程）の枠組をどのように整理するかの問題がある。

1) 教科内容の枠組
教科内容の構造を考えるに当たっては、体育科の特質をどう捉えるか。それは中心教材である運動種目の克服にウェイトを置いた考え方と同時に時代の社会的要請が考慮された学習内容が要求されるであろう。
そして、体育科の内容の枠組の基礎となる発達段階をどう捉えるか。そ

教科内要の構造			指導過程の構造		
内 容	本質的	基礎的	内容	方法	指 導 過 程
	教科の特質	発達の段階	運動の特性	教材の精選	
	社会の要請	認識の発達	発育の段階	種目の選択	
↓	内容の構造化を考える		過程の構造化を考える		↓
構 造	教科の内容（運動が中核）		指導の過程（技術の指導）		過 程
	運動内容をどのように整理するか（運動の構造）		技能要素をどんな順序で教えるか（技能の獲得）		
学習領域の整理			指導内容の精選		

第4図 教科体育の指導過程の構図

これは生徒の発達段階や発達特性にウェイトを置いた考え方と同時に、認識過程を考慮した教科の内容、方法、範囲に着目した精選が行われ、学習領域が整理される必要が生まれるのである。

2) 教科内容の構造

教科内容の構造を考える場合は、教科の目標と教材と学習内容が一連の関係にあって、そこでは技能を中核とした教科内容の構造化がある。そして、そのための指導内容の整理が要求されるのである。すなわち、学習内容である運動の構造を考えた教科内容の構造化が要求されるのである。

3) 指導過程の枠組

指導過程の構造を考えるに当たっては、運動の特性（体操、スポーツ、ダンスの内容）に応じて種目の選択をどうするか。そして、体育科の指導過程の枠組の基礎となる発育段階（発育の特徴と運動の特性を考慮した内容）にどのように対応させるか。種目の選択と内容、方法、範囲に着目した精選が行われ、指導過程が構造的に整理される必要が生まれるのである。

4) 指導過程の構造

指導過程の構造を考える場合は、運動の指導過程（技能指導）をどうすればよいか。そこでは学習内容の中核となっている運動技能の習得を考えた指導過程の構造化がある。そして、そのための技能要素の整理が要求されるのである。すなわち、運動の技能要素を選んでどんな順序で与えるとよいか。ここに技能内容の指導過程構成の作業が要求されるのである。

		基礎的 技能					応用的 技能					時間配分
個人	集団											
日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	月/日	次
	導 入	① ボール操作	② グループ技能			③ チーム技能、審判			④ 整理			
	(始)	中 心 (中) 課 題								(終)		
時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
目 標	動きのトレーニング グループ編成	ボールの操作 攻撃の基礎		グループ技能 3段攻撃プレイ(攻・防) ゲーム(攻守の基礎)			チーム技能 攻守の連けいプレイゲーム			意欲の高まり 技能の向上 ゲームの展開		
練習内容	オリエンテーション 素早い移動 からだの正面でボールを操作	パスラリー 正確なサーブ レシーブ スマイク、アタック		確実なレシーブ 守備範囲の拡大 攻撃とレシーブ隊型 レシーブからトス、アタック			攻守の切り替え 作戦とゲームの展開 応用技術 フェイント、ブロック			反省、評価 グループ活動 審判と協力		
必要技術	動きづくり パス オーバハンドパス 組手パス	レシーブ 直上トス、オーブン、アタック		ボールの動きに応じた 隊型の変化 レシーブ、トス、アタック			レシーブから攻撃へ 連携 3段攻撃の組織的プレイ ルールの理解と審判			ゲームの展開 ゲームの運営		

第5図 学習指導の計画例（中学校3年、バレーボール）

主 題：自主的活動を重んじた展開はどうするか（指導案作成の留意事項）			
段 階	活 動 と 内 容	自主的活動への配慮	指導者の動き
導 入	練習の見通し	動機づけ，要求水準	助 言
展 開	問 題 の 発 見	問題意識の高まりと解決活動	示 範
整 理	反省，ゲーム	意欲の高まりとグループ(チーム)づくり	方 法
指導案の展開（中学校3年，バレーボール，第3次，チーム技能）			
時	ね ら い	活動内容・問い	指導上の留意点
10分	(準 備 運 動)	柔軟体操，動きづくり	筋肉，関節を十分動かす 補強，補助運動も採用する
10分	本次の目標を把握する (審判)	(1) ねらい 攻撃＝3段攻撃の多用 防御＝攻守の連けい (2) 活動 ゲーム＝確かめる(課題発見) 〔問い〕	前時の課題も含めた指導 効果的な攻撃のためには 機敏な動きによるパスラリー 時間ゲームをする 問題点をつかむ
15分	チームの課題，個人 の課題を発見する (課題解決練習)	課題解決に対する効果的な練習 はどうすればよいか ゲームの反省 意見の交換 問題解決練習	課題解決のための練習と作戦 とルールの確認 作戦をたててゲームを有利に 展開するためにはどうするか 個人の課題，チームの課題
10分	作戦をたててゲーム を有利に展開	ゲーム＝確かめる	攻撃＝スパイクの効果 防御＝守備範囲の拡大
5分	(整 理 運 動)	反 省 と 評 価	次 時 へ の 課 題

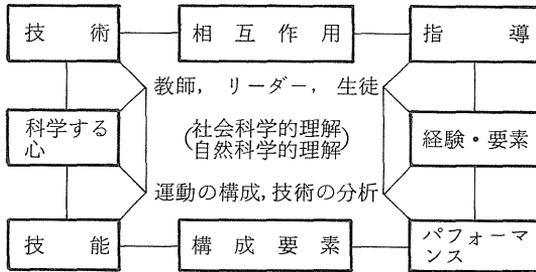
第6図 学習指導の展開図（中学校3年，バレーボール）

5 学習指導場面における関連要素

技術は客観的なものとして，学習の内容となるものである。技能はこの技術が学習され能力化した状態であると考えられる。すなわち，技術は「どのようにするか」の実際的仕方のことであり，その補助的手段である。そして技能は，どのようにするかが知られている「身につけている能力」のことである。当然のこととして個人差があり，技能を高めることによって自己の能力を十分発揮しようとすることは，学習の立場からも指導者にとっても目標となるものである。

個人に応じた種目（技術内容）の選択では，個別，能力別な個人の立場が基準になる。適応する条件は，可能性・成功性＝目標達成のよろこび，運動欲求・満足＝強制されない楽しさ，遊戯性・競争性＝過程でのゆとり，余裕のある内容が必要である。

興味は快感（快よさ）、満足（達成）などの調和から生まれる。意欲は協力（積極性）、率先（自発性）などの態度（適応行動の準備状況）によって示されるものである。すなわち、適応と興味は、種目（教材）選択の基本的条件となるのである。



第7図 学習指導場面の関連要素の構図

1) 運動技術の認識

運動の技術はからだの技術のことである。高級な技術になるほど小さな情報のかたまりが組織化され、体系化されて大きな情報量になっているわけである。この情報は、過去からの蓄積による運動文化財が含まれるもの、視覚によって得られるもの、言語や記号などによって抽象化された表現によるものなどである。すなわち、いずれの場合

でも何等かの手段によって、人から人へと伝達できる可能性のあるものである。技術は客観的なものとして学習の内容となるのである。練習経過と認識過程は調整されなければならない。

2) 秀れた技能の習得

技能は個別のやり方による手法の習熟や熟練によって、その手法を結合させながら「目的とする運動能力を達成する能力」のことである。技能は質の問題ばかりでなく、質量の関連から把握すべき事柄である。技術、技能とも目的達成の手段であるから、必然的に行動目的によって規定されるので、出来そうだという可能性の見通しや、活動の欲求を誘発することが大切である。すなわち、技能はそれ自体が練習の対象になると同時に、知識や経験による新たな相互関連を発見し開発して行くことによって、技能の向上を図るべきである。

3) パフォーマンスへの志向

パフォーマンスは、美しいホームやまとまった出来ばえなど、行事目標への到達のことであり、自己の能力の開発である。運動技能には運動体力が最も深く関連する。運動体力は、目的とする運動に必要なエネルギーの総合能力のことであって、体力のことは人間活動の基礎となる身体能力と考えることができる。したがって、旺盛な気力や激しいスポーツ活動に憧れをもつ年代においては、記録に挑戦し高度な技能をマスターし、ハードなトレーニングを克服する喜びに取り組むやり方も必要であると考えられる。例えば、競技力の向上にむけて情熱を燃やす姿は、この時代の関心事の一つである。したがって、自己能力（身体的能力、精神心理的能力）を引き出し伸ばすことによって、どこまで成果を発揮できるか、それこそ学習指導の具体的目標であり、かつ総括的目標というべきであり、それは自己実現のための課題となるものと考えられることができる。

4) 運動の構成要素（経験と科学志向）

学習指導場面の展開では、運動の特性を大切に捉えながら（指導者の立場と学習者の立場から）

どの運動（教材）では、どの要素を強調して指導するかが課題となる。そのとき運動の構成要素と技術分析によって、指導内容の系統化を図るべきである。この場合に依拠するところは、経験及び体験が基調となることが多い。それは経験及び体験によって具体的な事実として実態を把握できるからである。そのとき経験や体験による指導が定形化、画一化に陥ることを排除すべきである。

経験や体験は（指導者、学習者の）個人的、主観的な要素である。科学する心は一般普遍的、客観的な知識と技術の把握によって、学習指導過程の創造と合理化を図ることができる。ここでは生体科学、運動科学的領域の支援を導入することが必要である。経験を科学する心によって指導場面を構成し、技能の構成要素を系統的、段階的に整理し、内容の選択、精選を図るべきである。

5) 学習指導過程の基礎要因

技能学習を中心とした学習指導過程では、学習者の発達と認識過程を統合した成果を期待することである。活動展開の場面は、認識と練習と表現の連鎖的学習行為の総合的活動である。すなわち知識の体系化（運動技術の認識＝わかること）と、総合化（わかって練習学習すること）による学習指導の展開をすすめることである。ことに学習指導における認識過程（思考、認識の学習行為）は、「わからない」で反復練習することではなくて、練習過程の認識（思考）による「わかる」ことと「できること」の結びつきが必要である。すなわち、認識と練習の統一が基調である。認識過程を支える基礎的要因として、自然科学的理解と社会科学的理解のレベル的把握が大切である。

6) 学習指導の相互作用の場面（動機づけと社会科学的理解）

さきに、指導法に関連した論述を試みたが、体育科の学習場面では経験と科学する心の相乗的活動が基調となるべきである。学習指導の場面は、指導者と学習者、学習者と学習者の相互作用の場面である。適応、意欲、興味を醸成する教授操作の中であって、なおかつ参加意欲や興味を示さない学習者に対する配慮と対応の仕方を考える場面が起こる。そこではやる気のない者の動機づけの生み方が課題となる。体育やスポーツに関わる学習意欲を喪失させる要因を解消すべきである。

現代社会における教育の歪や進学、受験競争における教科の比重（入試受験に無関係）が体育学習の意欲を喪失させることはいなめない現実である。加えて健康・体力の保持増進に対する個人的、社会的不安とこれに対する教育的、行政的施策など社会科学的問題に対する理解と認識を図るべき状況がある。このことは、体育科の目標に明示されたものであり、日常生活の中で体育・スポーツの身体的活動や技術修得の意味を理解させることである。

学習集団の活動及び応用的集団活動の体験は、教師と生徒、生徒と生徒の接触による相互作用の場である。集団活動の役割分担と責任遂行、相互信頼と協力によって学習集団の凝集及び活動内容は、より堅固で膨らみをもった学習集団となることができる。このとき、教師の豊かな人間性と幅広い知識が期待されるのである。

一般的には、体育科教育法の内容は教科の対象論、目的論、内容論、学習指導論、評価論等を含んだ教授論として構成される。したがって、体育科教育の内容が体育の個別専門諸科学の導入によって具体化し、内容が科学化され、より一層学習者の立場にたった実践学習指導領域として構成されることが望ましいのである。